

## 『アストロフェルとステラ』

徳 見 道 夫

### I

『アストロフェルとステラ』(*Astrophil and Stella*)を書いたことによって、サー・フィリップ・シドニー (Sir Philip Sidney) は、「英国のペトラルカ」(English Petrarch) という名称を与えられたが、彼の詩作態度はペトラルカとは根本的に異なっている。その違いの一つは、恋人であるアストロフェルが恋に陥ることに反感を持っていることである。例えばソネット2番で、シドニーはアストロフェルがステラを愛するようになる経緯を描いているが、ペトラルカと違ってアストロフェルは時間の経過とともに、ステラを愛するようになるのであって、決して「最初の一目によるのでもなく、でたらめな弓の一矢によるのでもない」(Not at first sight, nor with a dribbed shot)<sup>(1)</sup>。しかしこのアストロフェルの愛のほうがペトラルカよりも、現実的で、真実味に富み、劇的である。彼は自分が恋に陥ったことを喜ばず、同じソネットの中で、自分の運命を「ひどく不公平な運命」(so partiall lot)と呼び、強制的に愛の命令に従っているのだと告白する。また表面には出ていないが、自分の「失われた自由」(lost libertie)や「知力の残り滓」(the remnant of my wit)を惜しんでいるかのような印象を我々は受ける。またこのソネットで一番衝撃的なことは、アストロフェルが愛を「私の住む地獄」(my hell)と最後の行で言っていることである。彼にとって愛とは悲しむべきものであり、地獄のようなところなのである。だがこのソネット全体から得られる印象は、アストロフェルが愛の地獄に反感を持っていないのではないか、ということである。一般的な恋人と違って、彼は自分の置かれている立場を冷静に分析し、客観的に自分を眺めている。この客観的な態度が、アストロフェルの言う地獄を少しも悲惨なものには感じさせず、むしろこのことを喜んでいる印象を我々に与えているのである。このようなアストロフェルの愛に対する反感と好感と好意というアンビヴァレンツな態度は、この連作ソネットの最初から存在しており、一つのテーマとなっているのである。

またアストロフェルはステラの愛に対して受身的である。例えば17番では、そのことが明白に

---

(1) William A. Ringler (ed.), *The Poems of Sir Philip Sidney* (Oxford University Press, 1962) 以下『アストロフェルとステラ』からの引用は全て上記の版からのものである。また日本語訳は私もそのメンバーである鹿見島シドニー研究会の翻訳を引用させて頂いた。

表現されている。キューピッド (Cupid), ヴィーナス (Venus), マルス (Mars) という神話的設定をして、自然 (Nature) をキューピッドの祖母に見做し、アストロフェルの個人的な経験をシドニーは描いている。<sup>(2)</sup> キューピッドは、母であるヴィーナスとマルスをもっと強い愛で結びつけるように、ヴィーナスから頼まれるが、マルスの怒りを恐れて、その仕事を拒む。そのためヴィーナスがキューピッドの不従順を怒り、彼の持っていた弓矢を折ってしまう。しかし祖母である「自然」がキューピッドを哀み、彼のために、ステラの眉と瞳で弓矢を作って与える。<sup>(3)</sup> そこで彼はすぐいつもの悪戯をはじめ、ちょうど通りかかったアストロフェルを射てしまうのだ。このソネットが象徴的に示しているように、アストロフェルの愛に対する態度は受身的であり、恋に陥った歓喜を歌うことはしない。20番のソネットも17番と同じようなテーマを扱っているが、ここではキューピッドを「人殺しの少年」(that murthring boy) と呼び、ステラの瞳の中に隠れて、通りがかりの獲物を狙っている「非道者」(Tyran) と名付けている。情景が目浮かぶような劇的な手法で、アストロフェルがステラを愛するようになった経緯を描いたこのソネットでも、結局は彼は「あわれな通行人」(Poore Passenger) なのである。

## II

何故アストロフェルはこのように愛に対して消極的なのであろうか。D. カルストーンはこの点に関して次の様に評している。

The world in which he has been trained, and which he abandons, fosters austere notions of public responsibility and a hostility to love. These values, weighed in the early poems, provide an alternative framework for judgment.<sup>(4)</sup>

- 
- (2) J. W. Lever はこの点に関して次の様に述べている。(J. W. Lever, *The Elizabethan Love Sonnet*, Methuen, 1956) "...and here too the appearance of Astrophel in the last line changes the whole angle of approach, converting the fable from an impersonal narrative to an interpretation of subjective experience (p. 66)
- (3) Sherod M. Cooper は次の様に述べている。(Sherod M. Cooper, *The Sonnets of Astrophel and Stella*, Mouton, 1968) "The shape of Stella's brows is similar to the shape of bows, but there is no such similarity between her eyes and arrows" (pp. 136-137). しかし「愛」の傷を与えるステラの視線は、キューピッドの矢と同じ働きをする点に於いて、この比喻は妥当なものと思われる。
- (4) David Kalstone, *Sidney's Poetry* (Harvard University Press, 1967), p. 136.

この事実も確かに一つの原因である。第4番のソネットでは、カルストーンの言う「公的世界の責任感」が「徳」(virtue)という概念で象徴的に語られている。「徳」はアストロフェルの心の中の「欲望」(will)と「分別」(wit)に争いを起こさせる。彼は、「徳」にカトー (Catoe) の心の中や、教会、学校で王笏を用いて欲しいと嘆願し、馬術のイメージを使って、「私の口は余りにもか弱く、御身からあてがわれるはみには耐えられぬ」(My mouth too tender is for thy hard bit)と言って、公的世界の責任から逃れようとする。しかしこのソネットの最後の6行で、アストロフェルは公的世界と私的世界の対立を避けるために、公的世界の価値観を私の世界—アストロフェルのステラへの愛—に持ち込もうとする。「徳」自身がステラを愛するようになるというアストロフェルの言葉は、彼の願望を如実に表わしている。第10番のソネットでは、理性(reason)がアストロフェルの捨てた公的世界を象徴的に表現しており、ここでも彼は公的世界と私的世界の融合を企てている。このアストロフェルの努力は第64番の最後の行「君は僕の知性であり、僕の美德であるから」(Thou art my Wit, and thou my Vertue)として実現するのであるが、ここに私的な世界である「愛」と公的な世界のものである「徳」と「知性」が合体し、ステラを愛することはアストロフェルにとって69番のソネットにある「有徳の道」(virtuous course)に他ならなくなるのだ。カルストーンはこの69番のソネットについて、

Astrophel reminds us of everything that must be given up for Stella: approval of the learned, fame, scholarly wit, achievement, position. The accumulated strength of what has been given up turns the concluding line into forceful declaration.<sup>(5)</sup>

と鋭い分析をしているが、シドニーが最後の行に最も自分の主張したいことを述べる彼独自の詩作方法を考慮に入れれば、「君は僕の知性であり、僕の美德である」という言葉は、アストロフェルの率直な心情の表現であると断定せざるを得ない。

第14番と21番のソネットでは、公的な世界を友達が具現しており、彼等の忠告—というよりむしろ非難—がテーマとなっている。14番のソネットでは、友達は愛のために破滅をする、とアストロフェルに忠告している。彼は愛の中に「欲望」(desire)の存在を認め、アストロフェルに一つの愛に対する考え方を示している。この非難に対してアストロフェルは、「罪」(sin)という言葉人を人に強烈な印象を与える方法で使い、愛に積極的な価値を認めている。このソネットでは、私的な世界が公的世界よりもアストロフェルの心の中に於いて優勢であることを示している。第21番のソネットでは、アストロフェルの知性は「くだらぬ思念には敏活だが、美德には働かない」

(5) *Ibid.*, p. 152.

(quicke in vaine thoughts, in vertue lame) と言って責められる。この場合の「くだらぬ思念」とはステラへの愛であり、「徳」とは公的世界の責任を表現している。このソネットでも「愛」と「徳」は対立的なものとしてアストロフェルに捉えられている。しかし彼はこの友達の非難に対して答えることはせずに、「この世にステラほど美しいものがあるか」(Hath this world ought so faire as Stella is?) とやや的外れの問いを友達にしている。公的世界にはステラほど追求に値する価値が存在するかというアストロフェル特有の表現であるが、このような解答しか与え得ないアストロフェルはまだ公的世界への未練を断ち切れず、ステラへの愛の価値を疑っているのである。カルストーンはこの間の事情を次の様に雄弁に表現している。

We often find him [Astrophel] questioning and redefining his attitudes, rather than reinforcing or deepening an initial impression.<sup>(6)</sup>

第19番のソネットに於いて、これまで述べた「愛」と「徳」の対立が最も深刻に述べられている。アストロフェルは最後の6行で公的世界への未練を切実に訴える。

For though she passe all things, yet what is all  
That unto me, who fare like him that both  
Lookes to the skies, and in a ditch doth fall?  
O let me prop my mind, yet in his growth  
And not in Nature for best fruits unfit:  
'Scholar,' saith Love, 'bend hitherward your wit.'

『なぜなら、彼女はあらゆるものより優れているとしても、  
それが一体私に何のかかわりがあるであろうか、  
空を見上げながら溝に落ちた人と同じ生き方をするこの私に。  
ああ、私に心の支柱が欲しい。私はまだ若く成長の途上にあり、  
生来の素質からも最良の果実を結べなくもない身なのだから。』

「学究の君よ」と愛の神が言う。「君の知性をこちらに向けよ。」

最後の行で、愛の神が登場してくるが、この一行で11.1~13のアストロフェルの主張を全面的に覆すことはできず、このソネットはアストロフェルがまだ公的世界を捨て切れずにいることを示しているものである。しかし第47番のソネットを見ると、我々はアストロフェルが最早ステラへ

(6) *Ibid.*, p. 161.

の愛からどうしても逃れ得なくなっているのを見出す。彼は自分の心の中にある徳に向かって叫ぶ。

Vertue awake, Beautie but beautie is,  
I may, I must, I can, I will, I do  
Leave following that, which it is gain to misse.  
Let her go. Soft, but here she comes. Go to,  
Unkind, I love you not: O me, that eye  
Doth make my heart give to my tongue the lie.

『徳よ、目覚めよ。美は美にすぎない。  
僕はできるかもしれない、しなければ、できる、やろう、やるのだ、  
捨てることが得であるものを追い求めるのを止めることを。  
彼女は手離すのだ。しっ、彼女がくるぞ。「ばかな、  
薄情者よ、僕は君なぞ愛していない。」 だが、なんと  
あの目は僕に言わせるのだ、「舌よ、うそをつけ」と。』

いつものようにアストロフェルが最も強調したいことは、最後の行の言葉である。彼自身も、「徳」の象徴する公的世界から自分は十分遠ざかっていることに気付いている。前にも述べたように64番で「愛」と「徳」を合体させる道を見出すまでは、アストロフェルの心の中では、このような対立が存在し、容易にステラへの愛に没頭することができないのである。この「愛」と「徳」の対立が『アストロフェルとステラ』の前半の基調音になっているように思われる。我々がここで注意しなければならないことは、この対立がアストロフェルの心の中だけであって、ステラとは関係がないことである。ステラの「徳」とは、69番の「有徳の道」という言葉で示しているように、プラトニック・ラブを意味しているのである。ステラの「徳」と対立するものは、むしろアストロフェルの「欲望」であり、この対立が後半のソネット群の基調音となっているのである。K. ミュアも『アストロフェルとステラ』の中に三種類の対立を認めており、その最後にアストロフェルとステラの対立と言っているが、<sup>(7)</sup> もっと正確に言うと、アストロフェルとステラの愛に対する考え方の対立ということである。愛の中に欲望の存在を認めるアストロフェルはどうしてもステラのプラトニック・ラブだけでは満足せず、破滅的な行動をとるようになるので

---

(7) Kenneth Muir, *Sir Philip Sidney* (Longmans, 1960), p. 30.

ある。<sup>(8)</sup>

### III

アストロフェルがステラへの愛にすぐ赴くことができなかった理由がまだ存在している。それは内容の浅い、コンベンション (convention) ばかりに頼る二流・三流の詩人達への反発である。シドニーは1580年に書いた *An Apologie for Poetrie* の中で次の様に言っている。

But truly many of such writings as come under the banner of unresistible love, if I were a mistress, would never persuade me they were in love; so coldly they apply fiery speeches, as men that had rather read lovers' writings, and so caught up certain swelling phrases (which hang together like a man that once told me the wind was at northwest, and by south, because he would be sure to name winds enough), than that in truth they feel those passions ....<sup>(9)</sup>

このようなシドニーの考え方は、『アストロフェルとステラ』の中でも、たびたび取り上げられており、彼はコンベンションを否定し、真の感情を率直に伝えることの重要性を説いている。特に1番のソネットは彼の詩作態度を明確に表現している。このソネットの中で、シドニーは（またアストロフェルも）他人の立派な詩想では自分の真の感情を伝えることができないので、自分の心を見て、その感情を正確に伝える言葉を見つけようと決意を述べている。「そなたの心の中を見て、書け。」(looke in thy heart and write) という言葉は有名なものであるが、これほどシドニーの詩作態度をあらわしているものはない。もっとも、自分の感情を正確に分析し、アストロフェルの中に欲望の存在を発見し、それがステラの不興を買い、破滅に至るのであるが、これはコンベンションで自分の心を偽ることができないシドニー自身の悲劇の反映であろう。とにかく第1番のソネットで、シドニーは自分の心の中を正確に見て表現する道を選んだ。第3番のソネットでは、コンベンションに頼る二流・三流詩人に対するシドニーの軽蔑を我々は感じる。

Let daintie wits crie on the Sisters nine,  
That bravely maskt, their fancies may be told:

---

(8) この点は『アストロフェルとステラ』の後半のソネットとソングの中で明らかなものとなるが、詳しい論究は次の機会に譲りたいと思う。

(9) Robert Kimbrough (ed.), *Sir Philip Sidney* (Rinehart Press, 1969), p. 152.

Or Pindare's Apes, flaunt they in phrases fine,  
Enam'ling with pied flowers their thoughts of gold:

Or else let them in statelier glorie shine,  
Ennobling new found Tropes with problemes old:  
Or with strange similies enrich each line,  
Of herbes or beastes, which Inde or Afrike hold.

For me in sooth, no Muse but one I know:  
Phrases and Problems from my reach do grow,  
And strange things cost too deare for my poore sprites.  
How then? even thus: in Stella's face I reed,  
What Love and Beautie be, then all my deed  
But Copying is, what in her Nature writes.

『繊細な感覚の持ち主らには、九人の姉妹<sup>ミューズ</sup>を呼び求めさせるがよい、  
すれば、彼らの空想をきらびやかに飾り立てて語ることができよう。  
また、ピンドロスの猿まね共にはまだらの<sup>はな</sup>詞華で金びかの思想を彩色させ、  
美辞麗句をまとわせ、得々と練り歩かせればよい。  
さもなくば、新発明の言葉のあやに、古い命題をそえて気品をもたせ、  
彼らをさらに堂々たる誉れで輝かせさせたらよい。  
あるいはインド、アフリカで育つ植物や動物を素材とした  
異国風の直喩をちりばめ、一行一行を豊かにさせたらよい。  
私はといえば、実のところ、知っている詩神はただひとり。  
言葉や命題は自分の手のとどく範囲から生れ出るものばかりで、  
舶来品などは私風情の貧弱な精神には高価にすぎるといふもの。  
ではどうして。こうとでも言おうかステラの顔にこそ、  
私は愛と美の実体を読みとる。そして、私にできることは、ただ、  
彼女の中に自然が記したことを写しとるだけ。

このソネットの1～2行で、シドニーはスペンサーなどの詩的靈感の礼賛者に言及しており、  
3～4行で16世紀フランスで活躍したロンサール (Ronsard) などの「すばる派」(Pleiades) の詩  
人達に言及しており、彼らはピンドロスやその他のギリシヤの詩人達の詩風を模倣した。また5  
～6行で、T.ワトソン (T. Watson) などのように、詩に古典的修辞学を取り入れ、奇をてらっ  
た人々に言及し、7～8行では、J.リリー (John Lyly) などの散文作家の作風に言及してい

る。<sup>(10)</sup> このような詩人達とは対照的に、シドニーはステラを唯一の詩神として選び、自然がステラの顔に書いたものを写すだけだと宣言している。コンベンションのみで、真の愛情を心に感じていない詩人達を、彼は軽蔑しているのである。6番のソネットも同じようなことをテーマとしており、ここでもコンベンションよりも自分の感情を率直に表現することのほうをシドニーは称賛している。「私はステラを愛する」(I do Stella love) という素直な表現こそ、どのようなコンベンションでも伝えることのできないアストロフェルの真情を明らかにすることができるのである。

## IV

このように考えることによってすぐシドニーがコンベンションを完全に否定していると断定するのは早計であろう。T. スペンサー (Theodore Spencer) も指摘しているように、16世紀の詩人達はコンベンションによって自分独自の表現方法を確立していったのである。<sup>(11)</sup> シドニーは自分の真情を表現する時、コンベンションに頼る詩人を軽蔑しているだけであって、コンベンションそのものを否定しているわけではない。詩を書く以上、たとえシドニーであろうと、コンベンションを無視することはできない。コンベンションを用いることによって、言葉に広がりや深みを与えることができる。シドニーはこの連作ソネットの中で何回も、自分の詩の源はステラであると言っているように、*An Apologie for Poetrie* の中でも、詩人は自然を模倣するものであると述べているが、詩のテクニックやコンベンションそのものを否定しているわけではない。この間の事情を S. クーパーは次の様に説明している。

However, because art is only an imitation of nature, the artist must employ various techniques to make this imitation seem convincing and true.<sup>(12)</sup>

しかしシドニーの心には、前にも述べたように、コンベンションやテクニックのみに頼る詩人達に対する軽蔑は明らかに存在している。この軽蔑のために、彼はアストロフェルが他の詩人達と同じようにすぐ恋に陥り、愛の歌を歌うことを許さないのである。D. カルストーンも指摘しているように、アストロフェルはそのシドニーの軽蔑を反映して、他の詩人達の批評家となっているのである。<sup>(13)</sup> しかしシドニーはペトラルカ風コンベンションに対立することによって、自

(10) Ringler, p. 460.

(11) Theodore Spencer, "The Poetry of Sir Philip Sidney" *ELH*, xii (1945), pp. 266-268.

(12) Sherod M. Cooper, p. 26.

(13) David Kalstone, p. 106.



分の連作ソネットを現実的なものとし、多くの読者に受け入れやすくし、画期的な詩風を確立したのである。たしかにこの連作ソネットに見られる伝記的要素が当時の読者に現実性を与えているという事実は見逃すことのできないものであるが、<sup>(14)</sup> シドニーが新しい実験を試み、そのためにこのソネット群に新しい現実性を付与していることも否定できない。

以上見てきたように、アストロフェルが愛に対して微妙な態度を取った理由は、作者シドニーが育った環境が彼に与えた徳と彼のコンペションとの対立（あるいは時には和解）のためである。このアストロフェルの態度は連作ソネットの後半になるとなくなっていくが、この態度が連作ソネットの前半の基調音になっていることは疑う余地がない。

〔論文受理 1978.9.9〕

---

(14) Malcolm W. Wallace は *The Life of Sir Philip Sidney* (Octagon Books, 1967) の中で、『アストロフェルとステラ』の伝記的要素を強調している。